

士族の叛乱

— 裏切られた「革命」に抵抗した士族たち —

明治維新は「尊皇攘夷」を旗印として、諸藩（薩長土肥が中軸）の武士の活躍によって成し遂げられた。しかし、明治新政府の施政方針は彼らの思い描いていた社会とはまったく反対方向に歩み始めた。版籍奉還、秩禄処分、廃藩置県、徴兵令、地租改正、廃刀令等…、矢継ぎばやに改革が断行されて、武士の拠って立つ基盤を根底から破壊されていった。武士身分の呼称は「士族」として残されたものの、日々の生活は窮乏を極めた。その不平不満はそれぞれに異なっていたが、新政府への怨嗟の声は全国に満ちあふれていった。

では、それら諸改革がどのように士族を追い詰めていったのか。

● 版籍奉還（明治二年三月）

版籍奉還は、幕藩時代の諸大名の領地と人民を朝廷へ返還を命じたもので、同時に大名の家臣団の家禄を大幅に削減させた。徳川宗家はもっとも悲惨で、八百万石といわれた総石高を駿河・遠江の七十万石へ移封させられ、旗本・御家人二万数千人の大半が無禄（無給）となった。大名は「藩知事」の称号を得たが、高禄の家臣たちは削封の上、土地・人民の支配権を奪われた。

身分制度では、公家・大名（藩主）は【華族】、武士は【士族】、足軽・仲間【卒族】、農・工・商人は【平民】と規定した。卒族はのち士族と平民に分けられて、その呼称は消えた。

● 廃藩置県（明治四年七月）

明治新政府は中央集権を確立し、全国統一を果たすために廃藩置県を強権をもって断行した。藩知事（諸藩主）を東京へ移住を命じ、その領地と人民を切り離し、また家臣団との主従関係を解消させた。藩知事を廃止して、代わりに中央政府から「県知事」を派遣した。始めは三府・三百六県を数えたが、その年に三府・七十二県に整理した。これによって士族は藩という帰属する位置を失い、中央政府や地方機関に就職の伝手を求めて、役人勤務の道を選ぶか、帰農するか、商工人へ転向をせざるを得なくなった。

戸籍法改正によって、平民にも苗字を名乗ることが許され、士族が矜持とした特権を奪われたが、もっとも彼ら士族を激高させたのが「徴兵令」であった。

● 徴兵令（明治二年十一月発布）

提案者は兵部卿大村益次郎である。大村は近代国家を形成するにあたっては兵制改革が急務であり、それには国民皆兵の制度が必要だと考えた。四十万の士族を常備軍に編成するには、財政的基盤が貧弱だったから、平民（農工商）から国民の義務として徴兵する制度を確立しようとしたのである。

しかし、徴兵令は士族・平民の双方から激しい抵抗運動が巻き起こった。戊辰

戦争を命懸けで戦った官軍士族にすれば、新政府から優遇を受け、俸禄も安堵されるものと思っていた。しかるに俸禄を削られた上に、士族の士族たる由縁の兵権（武権）までが奪われ、ドン百姓と蔑んできた農民や職人・商人と同列に兵役に就くことなど断じて容認できなかったのである。国民皆兵に反対する士族は大村卿暗殺に止まらず、長州藩においては兵制改革に不満をいなく藩兵の脱退騒動が起こっている。

一方、平民にとっても武権は士族のものであり、兵役など考えてもみなかった事柄であった。明治五年十一月一日に「全国徴兵の詔」が公布されたが、その中に「凡そ天地の間一事一物として税あらざるはなし。以て国用に充つ。然らば則ち人たるもの固より心力を尽くし、国に報ぜざるべからず。西人これを称して血税と云ふ。その生血を以て国に報ずるの謂れなり」とあった。

この「血税、生血を以て国に報ずる」を誤解（生血を搾り取って外人の飲料にする）した庶民、ことに農民の血税騒動として徴兵反対の一揆が、名東県、小倉県、北条県、大分県、香川県下など各地に続発した。

士族も反対、平民も反対。にもかかわらず両者は共同戦線を張ることはなかった。不思議なことに、士族は庶民の徴兵反対を鎮圧するために動員され、これに応じている。福岡県下では士族が動員され、血税一揆の人民を殺傷した数によって懸賞金を出して奨励したという。

●地租改正（明治六年七月公布）

大名や武士の領有した土地から民衆の土地所有権を認め、その土地の地価を定めて租税（地租）を徴収する制度である。土地所有者には地価を記入した地券を発行し、地価に対して地租率3パーセントを金納で納税させた。田畑を耕作する農民はこれまでの現物納税から金納となれば、生産品を売却する手間もかかり難儀なことだった。しかも、これまでの年貢総額を減じてはならぬ、という政府の命令であり、地価額も一方的に押しつけた例が多かった。これに不服な農民に対しては「官の決定に抵抗する者は朝敵であるから、皇国の地に住むことを許さない」と威嚇した。

明治御一新で減税を期待して裏切られた農民は、地租改正反対の一揆を起こした。明治九年の蜂起は激しく、ついに政府も翌年一月、地租率を2・5パーセントに引き下げ、「竹槍でチョイと突き出せ二分五厘」の川柳が出た。

●金禄公債（明治九年八月）

華族・士族にはそれまで家禄・賞典禄（維新の功劳禄）が支給されていたが、これを金禄公債証書を発行し、その利息を以て支給するもの。士族は版籍奉還によって家禄を十分の一に減らされ、高禄取りの士族以外はみな生活困窮に喘いでいた。政府は帰農や商人に転向する士族には一時賜金を設けたり、華士族で賞典禄百石未満の者には奉還を許可した。奉還者には、永世禄には六ケ年、終身禄には四ケ年分を、現金半分、公債半分で渡し、公債利子を八分とした。奉還者は明治七、八、九年の三ケ年で総計九万五千人、その奉還禄高は百十一万五千石に達

したという。その公債もやがて商人や高利貸しの手流れていった。

金禄公債の利子で悠々と生活できたのは、華族（公家・大名）とほんの一部の士族だけであった。

● 廃刀令（明治九年三月）

先祖代々の家禄を奪われ、武士の矜持たる兵権をも失った士族に止めを刺したのが「廃刀令」であろう。最後に残された士族の唯一の誇りである、「武士の魂」を腰にできなくなった悲憤は想像するに余りある。

大礼服の着用並び軍人、警察官等の制服着用の者以外は禁止となり、違反者はその刀を没収された。しかし、なかなか永年の習慣は断ち切れず、仕込み杖に拵えたりして手放さなかった。なかには帯刀に執着して軍人や警察官を志願する者も多かった。

士族の事件史

以上のような明治新政府の諸改革で、士族の多くは家禄を失い、その特権を次々と奪われ、日々の生活は困窮に落ち込んでいった。むろん、薩摩・長州・土佐・肥前の維新の原動力となった雄藩の士族の中には、朝臣として新政府の要職に就いた者が多く、とくに「薩長閥」が著しかった。

しかし、そもそも王政復古の維新事業は全国の勤王志士が「尊皇攘夷」をスローガンに成し遂げた革命であった。ところが、新政府は「開国欧化」策に舵を切り、西洋文明を積極的に取り入れて「文明開花」を標榜した。西欧列強が取り巻く当時の日本周辺の事情から止む得ないことだったが、「攘夷」派の士族はこれを裏切りと見た。

それら攘夷派士族や新政府に採用されなかった不平不満の士族は、その生活困窮と相俟って、次々と新政府を震撼させる事件を引き起こした。

● 参議・横井小楠の暗殺

明治二年一月五日、参議横井小楠が宮中から退ってくる途中、京都寺町通丸太町で刺客に襲われて斬殺された。新政府初めの大官暗殺であった。刺客は五人、いずれも攘夷派の士族・郷士たちで、暗殺の理由は「洋説に耽溺し、終に耶蘇教を弘張の志これ有るかなに巷説」からという。キリスト教を布教しようという志があるという噂を聞いて暗殺したというのである。

犯人は捕まったが、彼らに同情する声が多く、「刺客らを寛典に処し、死一等を減ぜられるように」という嘆願書が政府に殺到し、政府部内でも助命運動をする者さえあった。処刑が決まったのは翌年のことで、十月十日に極刑（上田立夫ら四名、斬首の上臯首）に処せられた。

● 兵部卿・大村益次郎の暗殺

明治二年十一月五日、大村は兵制改革の準備のために京都三条木屋町の宿舎に滞在中、刺客に襲撃されて刺された。刺客から逃れて風呂桶に隠れていたが、傷口が化膿して敗血症になった。大阪府の病院に運び蘭医ボードインの診察を受けると、ただちに切断手術を主張した。しかし、当時大官の手術には必ず勅許を仰ぐことになっており、そのため時間を費やし手遅れとなって死亡した。

刺客は「国民皆兵主義をもって、士族の常職を剥奪するものである」とする団伸次郎、神代直人ら長州奇兵隊及び十津川親兵隊の脱走士族であった。この暗殺犯の背景には京都弾正大忠の海江田信義がからんでいたといわれ、また同情を寄せる者が多くあり、断罪はおおいにもめた。海江田は薩摩藩士で「生麦事件」で英国人に止めを刺した根っからの攘夷派で、大村とは戊辰戦役ではことごとく対立し、犬猿の仲だったという。

●山口脱退兵事件

明治二年十二月、山口藩の兵制改革、諸隊解散の断行に不満な遊撃隊の隊士二千名が大量脱退した。この事件の思想的主体は大村暗殺と同根である。山口藩は諸隊を解散し、新たに精鋭を選抜して常備軍四個大隊を編成した。幕末維新に有名を馳せた奇兵隊、遊撃隊の隊士はこぞってこの兵制改革に反対し、翌年一月、隊士一千名が突如山口の藩庁を包囲した。この挙兵に年貢軽減を求める農民たちが蜂起し、加わった。指導者は人望があった大楽源太郎だった。

参議木戸孝允は急遽帰国し、豊浦、徳山、岩国、清末の各支藩兵を率いて、脱退兵を討伐した。維新戦争を共に戦った者同士が殺しあい、夥しい死傷者を出した。叛乱鎮定後、幹部三十五名を斬首し、死体を古井戸に投げ込むという残酷行為をした。大楽は逃れて、久留米へ潜入し、再度の挙兵を計画する。

●雲井龍雄事件

雲井は米沢藩士で本名を小島龍三郎といった。佐幕派の闘将として奥羽諸藩を連合させるなどして抵抗した有名な男であった。明治二年、上京して衆議院に入り、しばしば献策するが、賊将の経歴から相手にされず、まもなく退院を命じられた。政府に悪感情を抱いた雲井は「帰順部曲点検所」を開設し、表向きは諸藩の徒を鎮撫するという大義名分を掲げ、じつは同志を糾合して政府転覆の陰謀を企てた。その主張は「薩長がみだりに錦旗を動かし、徳川氏を冤罪に陥れ、姦謀を以て会桑二藩を排除し、王政復古の美名の以て、政権を独占せんとする。我が一身を抛ち、誓って徳川の冤を雪がん」といい、東国の志士を糾合して天下の為に二賊（薩長）を倒そうという計画であった。

薩長土肥の藩閥専制政治に不平不満の士族たちが続々と結集し、合計二万五千人に膨れ上がった。維新戦争で朝敵にされた諸藩の士族や、欧化政策やキリスト教布教に憤激する攘夷派士族たちで、雲井のクーデターに一縷の望みを託したのである。しかし、明治三年四月、事件は発覚し、雲井一味は一網打尽になった。

雲井は斬首の上、梟首。その他十一人は斬罪に処せられた。雲井龍雄は二十七歳、凄まじい拷問にも同志の名を白状しなかったという。

●愛宕事件（久留米事件）

大楽源太郎は久留米に潜入し、同志の久留米藩士や熊本藩士高田源兵衛（川上彦齋）らと再挙兵を謀った。まず久留米藩主有馬頼咸（よりしげ）を説得し、次に公卿愛宕通旭、外山光輔、沢宜嘉を説得して一味に引き入れ、山口、久留米、熊本、土佐、小倉、柳川、秋田、越後の広範囲にわたる士族を結集し、一挙に政府転覆を謀るという大がかりな計画だった。その思想的根拠は「王政復古の後は堂上方が政権を執られるべき筈なのに、却って非役となり、官僚の横暴は目に余り、百姓一揆が所々に起こっている。凡そ人民の困窮は物価騰貴で、これは外国貿易によって生じている。これは先帝（孝明天皇）を煩わせた攘夷を執行せずに、維新後は外交を厚くしたことが原因である」という復古的、保守的、攘夷的思想を基盤とする反動の激発であった。

明治三年五月二十日が、一斉挙兵の日であった。しかし、各地の準備が整わずに延期した。内輪もめもあり、政府の詮議も厳しくなり、大楽は隠れ家を転々と逃げ回っていた。そのうち、公卿の沢が動揺し、有馬も政府から謹慎を命ぜられた。久留米藩では嫌疑を避けるため、大楽を偽っておびき出し暗殺した。

首魁・大楽の死で計画は頓挫し、謀略に関わった者は一斉に逮捕された。主な一味の処分は次のようになった。

久留米藩主	有馬頼咸	閉門
久留米藩士	小河真文	斬罪
肥後藩士	高田源兵衛	斬罪
柳川藩士	古賀正幸	斬罪
秋月藩士	初岡敬二	斬罪
公卿	愛宕通旭	自刃を命ぜらる
公卿	外山大輔	自刃を命ぜらる
公卿	沢 宜嘉	閉門後自刃

●広沢真臣・前原一誠襲撃事件

明治四年一月九日の未明、新政府の大立者で参議・広沢真臣が刺客に襲われて殺害された。同じ日同じ時刻、萩の自宅で就寝中の前参議・前兵部大輔の前原一誠も襲撃された。前原は暗やみに身を潜めて無事だったが、二つの襲撃事件は同時に起こっていることから、計画的な暗殺だったらしい。

それに両方の事件とも犯人が分からず、迷宮入りとなった。これまでの不平士族による犯行ではなく、政府内の暗闘が原因といわれ、その黒幕は同じ長州閥の木戸孝允だったといわれている。広沢は長州閥を代表する実力者で、頭脳といい学識、政治力といい、新政府を率いる最高頭脳で大いに将来を嘱望された人材であった。

前原は吉田松陰の松下村塾の四天王の一人で、久坂玄瑞・高杉晋作・吉田稔麿と並び称された男である。前名を佐世八十郎といった。幕末維新の戦争では著し

い軍功を挙げ、明治二年七月従四位となり、参議に任ぜられている。参議になったのは木戸よりも早かった。

長州を代表する四巨頭（大村益次郎、広沢真臣、木戸孝允、前原一誠）の二人が暗殺され、木戸と前原の二人となった。脱退兵の乱では、当時、兵部大輔であった前原は大楽源太郎らを説得して、暴発を止めるつもりだった。それを木戸は自ら出向いて討伐し、死体を古井戸に投げ込むような残虐行為をした。

政府の権威を示すためという木戸の冷酷さに、西郷流の温情主義の前原は肌が合わず対立した。長州閥の指導者同士の勢力争いであった。ある日、長州から腹心の某がやってきて、「山口では乱臣が潜伏し不穏な状況です。藩主が心配し、至急に貴下に藩に帰ってもらい、藩の改革をしていただきたいとのことです」と告げた。前原はそれが藩主の意志だということで、すっかり信用してしまい、兵部卿を辞して萩へ帰った。その途中、大阪の天保山で刺客に襲われたが、この時も運よく難を逃れた。不思議なことだなと思いながら、帰国してみると、藩主は前原を帰国させる意志などまったくなかったと知り、謀略に嵌められたと悟った。かくて木戸と前原は互いに仇敵視することになり、やがて萩の乱となる。

●佐賀の乱

薩長土肥の肥前藩の代表者・江藤新平は参議・司法卿として、近代司法制度を整備した有能で傑出した人物であった。明治六年、征韓論に敗れて西郷隆盛らと共に下野し、故郷の佐賀へ帰ると、征韓論を支持する士族や島義勇を支持する憂国党が江藤を待ち受けていた。佐賀士族の薩長専制に対する反発は激しく、彼らは江藤を政府打倒の首領に担ぎあげた。

江藤は旧藩校弘道館に「征韓先鋒請願事務所」の看板をかかげ、兵器を集めて挙兵の準備を整えるとともに、薩摩の西郷、土佐の林有造に密使を飛ばして、ともに決起せんことを説いたが、呼応の返事はなかった。明治七年二月一日、憂国党が小野組の支店を襲撃して金穀を掠奪し、叛乱の狼煙をあげた。

政府はただちに熊本鎮台に出兵を命じ、軍事・裁判の全権委任を受けた内務卿大久保利通が自ら博多に乗り込んで討伐の采配を揮った。さらに大阪、広島鎮台を出動を命じた。江藤ら反乱軍二千五百名は佐賀城を攻めて、県令岩村高俊を敗走させたが、新鋭装備の政府軍が進撃してくると、攘夷主義の旧式士族軍はひとたまりもなく敗れ、江藤と島は早くも佐賀を脱出しなければならなかった。

江藤は鹿児島へ逃れ保護を求めたがことわれ、日向から伊予へ渡り、土佐へ潜入して林を訪ねたが、ここでも保護を拒否された。やむなく海岸沿いに阿波に入ろうとしたところ、三月二十九日逮捕された。島は三月七日、すでに鹿児島で捕らえられていた。

大久保は佐賀に臨時裁判所を開き、司法卿時代に江藤が立案した「新律綱領」の謀反の罪により、江藤と島は斬首の上、梟首に処した。

●神風連の乱

明治九年十月二十四日夜、太田黒伴雄を首領とする「神風連」の百七十名は熊

本鎮台・県庁を襲撃して鎮台司令官種田政明、同参謀高島茂徳、県令安岡良亮を斬殺した。太田黒は熊本郊外にある新開大神宮の宮司で、林桜園に国学と神道を学んだ肥後勤王党の一方の旗頭でもあった。彼ら敬神党（神風連は綽名）はいずれも頑迷固陋な国粹主義者で、欧化政策や廃刀令には憎悪した。

決起の日時は太田黒が新開大神宮で宇気比による神意をきいて決定。一同は三種の神器の写しを懐中に納め、小さな鏡を袋に入れて首にかけた。手にする武器は刀と槍のみ、西洋臭い鉄砲は禁物であった。最初は砲兵營を襲い、小銃のないのを幸いに百余名を斬殺したが、小銃を手にした歩兵隊が応戦しはじめると形勢逆転、太田黒以下二十八名が戦死した。党员たちは「死んで護国の鬼となる」という太田黒の最期の言葉に従って、めいめい場所を選んで自決した。

●秋月の乱

神風連の乱に呼応して、旧秋月藩士宮崎車之助ら四百人の士族が、征韓問題の政府の措置を非難し、国権拡張・対外進取政策を主張して蜂起した。しかし、戦略目的もなく、ただ山中を駆け回っただけで、小倉歩兵第十四連隊にあっさりと鎮圧された。指揮した連隊長心得は、当時二十八歳の乃木希典少佐だった。

●萩の乱

前原一誠を首領とする士族二百余人の萩の乱は、思想的には奇兵隊事件と同一のもので、その継続的な暴発とみることができる。前原はいう。「士族の常職を解き、禄券を製するや、廟堂の諸公のいふらく、士族固陋にして不平を鳴らすものあらば、之れを討伐するに兵力を以てすれば可なりと。咄（おや）、我が四十万の士族果たして何の罪がある」と朝鮮問題、地租改正、樺太交換問題、士族問題の政策を批判し、これを攻撃した。突き詰めれば、これもまた守旧派士族の叛乱であった。

「前原一誠をたたくと吉田松陰の音がする」と揶揄されたように、前原は松陰の尊皇攘夷精神に心酔し、その後継者たることを自負しており、政府の要人も官吏もみな西洋かぶれしていることに我慢がならなかった。松下村塾に学んだ木戸や伊藤（博文）らは松陰先生の精神に反したことばかりやっている。これを是正せねばならん、と考えていた。そこへ藩閥政治の打倒を使嗾する壮士たちが続々と萩にやってきては、前原に挙兵を促した。その中には政府の密偵もいて、前原の言動は逐一報告されていた。

明治九年十月二十四日、熊本の神風連が決起した。二十六日、明倫館講堂に前原党八十余名を集め、山口へ進撃し県庁を占領したのち東上し、政府要人の交代を闕下（けっか・天子のこと）に奏上すると宣言し、翌日、表門に「殉国軍」の門標をかかげ、その夜、沖原製銃所を襲って銃器を奪った。

二十八日、集合した百余人の同志と山口へ向かおうとした矢先、熊本・秋月の乱はすでに鎮定したから、すぐに解散するようにとの関口県令の使者がやってきた。前原らはこれを山口に鎮台兵が進出してきていると、早合点して、山口への進撃を中止し、山陰道を通って東上することに決めた。二十九日出発し、翌三十

日朝、須佐海岸に着き、ここで漁舟に分乗して浜田をめざしたが浪荒く、江崎へ上陸した。そこへ前原党の家族が捕らえられ虐待をうけ、諫早党（木戸の一派）が明倫館を占拠したという噂が流れた。諫早党の放ったデマだったが、うかつにも信じ込み、萩へ引き返した。そこへ大阪、広島の大鎮台兵千二百名が到着し、前原党五百名との間に銃撃戦がはじまり、叛乱軍は壊滅した。前原はなおも上京しようと、越ヶ浜を出航し、十一月三日、出雲の宇竜港へ着いたところを逮捕された。萩へ送られ、前原、奥平謙輔、山田颯太郎（前原の弟）、佐世一清（前原の弟）ほか三名が斬罪になった。

●大久保利通暗殺事件

明治十年の西南の役のさなか、五月に木戸孝允が病死し、四ヵ月後の九月には西郷隆盛が城山で戦死した。維新の三傑でただ一人残った大久保も翌十一年五月十四日、東京紀尾井坂で刺客の襲撃をうけ暗殺された。刺客は石川県士族島田一郎、同長連豪ら六名で、首謀者は島田であった。島田は忠告社千名の頭領であったが、板垣退助らの言論主義にはあきたらず、暴力主義の秘密結社を組織し、政府要人を狙った。大久保暗殺の『斬奸状』には「公儀を杜絶し、民権を抑圧し、以て政治を私する其の罪一なり」と断じ、そして「有司専制の弊害を改め、民会を起し、皇統の隆盛、国家の永久、人民安寧を致すべし」というものだった。

これらテロリストはいずれも青年士族であり、木戸孝允、大久保利通、岩倉具視らを奸魁視し、大隈重信、伊藤博文、黒田清隆、川路利良らもまた許すべからざる巨魁と見ていた。島田らは西郷隆盛の同情者で、斬奸状にも「昨年西南の事起こるに会し一郎もとより西郷の非理を凶るの反賊に非ずして、而して事端の起こるは奸吏輩の陰謀に因るを審らかにし旦夕、西郷等若し亡ぼせば、国家前途の事は遂に已むを知る」とある。西郷の西南の役による敗北を惜しみ、西郷をそこに追い込んだのは大久保一味の陰謀であると信じている心境がよく分かる。

島田らは大久保暗殺後、宮内省に自首して出ている。天子の赤子の泣訴する形態として、彼らの精神構造がうかがわれる。

六人の判決は、同年七月二十七日、午前十時司法省臨時裁判所で行なわれ、六人とも斬罪であった。即日、市ヶ谷監獄署に送られて斬首された。この事件に関係して処罰された者は二十二名であった。